慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	江戸時代の相州"江之島絵図(刊行図)"
Sub Title	
Author	白石, 克(Shiraishi, Tsutomu)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	1984
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.21 (1984.) ,p.297- 349
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	太田次男教授退職記念論集
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-00000021-0297

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

＊注記・・論文中の写真について転載する場合は斯道文庫にお問い合わせ下さい。

江戸時代の相州〝江之島絵図（刊行図）〟

白石　克

「吾妻鑑」より江の島についての記録をみると、寿永元年四月五日の条には、高雄文覚上人が頼朝の御願を祈るために弁才天を江の島に勧請のこと、承元二年六月十六日の条には江の島竜穴（御岩屋）にて鶴岡八幡宮の供僧等が雨乞いの祈請すること等、〝江島〟或いは〝江島明神〟の名称で同書に度々記載されていることがわかる。それ以前の江の島の様子は「江島縁起」諸本や考古資料によりある程度想像することもできるが、よくわからない。(注) 本稿ではこれらについては後述、略縁起についてのみ若干ふれるだけに留めたい。

江の島が古来より霊地で名勝地でもあることは鎌倉期から室町期の紀行文等「海道記」「東関紀行（源親行）」「北国紀行（堯恵）」「梅花無尽蔵（万里集九）」「東国紀行（宗牧）」にふれられていることによってもうかゞえる。江戸期に入り、京都・大阪・江戸に次いで刊行図が作られた高野山・日光・鎌倉・伊勢とほゞ同時期に江の島と金沢八景の絵図もできているように、当時も東海道に近い有名な名勝地であったことがわかる。しかし金沢八景と共に江之島の絵図は江戸前期中期の書籍目録には所収されていないので、鎌倉絵図のように京都で刊行されたものはないかもしれない。両地共に鎌倉を中心とすれば、その東西の名勝地という事情で知られていたので、鎌倉絵図よりは若干刊行の時期も遅れると思われるが、さほどの差はないであろう。古くから東海道の上り下りに多くの人がまわり道をして、

鎌倉・江の島・金沢八景に立ち寄っていたと思われる。一般庶民が江戸から東海道の旅とは別に、この三地を目的に遊覧旅行をし始めたのは、江戸時代後期以降であろう。江の島の三社の御開帳には江戸より来た参詣者で賑わっていたことが「武江年表(斉藤月岑)」にて想像できる。同書には寛延二年の弁才天開帳(三社)以来、その都度〃江戸より参詣多し〃の注がつけられている。そこで同書と「藤沢市史　第五巻(昭和四十九)」「江戸町人の研究　第一巻(昭和四十八)」等によって、江の島の御開帳年時を左に掲げると、

寛延二年四月～七月(弁才天　三社)、宝暦五年四月～七月(上之宮弁才天)、宝暦十一年四月十五日～(岩屋弁才天)、明和四年四月～(下之宮弁才天)、安永二年四月十一日～七月二十一日(上之宮弁才天)、安永八年四月～七月(本宮岩屋弁才天)、天明五年三月八日～(下之宮弁才天)、寛政九年(江之島弁才天)、文化六年四月～七月(本宮岩屋弁才天)、文化十二年四月十五日～(上之宮弁才天)、文政二年三月三日～六十日間(岩本院岩屋弁才天)(江戸深川永代寺出開帳)、文政四年三月三日～百日間(下之宮上之宮弁才天)、文政十年春～夏(上之宮弁才天)、天保四年三月七日～(下之宮弁才天)、天保十年(江之島弁才天)、弘化二年三月十五日～(上之宮弁才天)、嘉永四年二月二十八日～百日間(岩本院窟弁才天)、安政三年八月九日～六十日間予定(岩本院岩屋八臂弁才天)(江戸深川永代寺出開帳)、安政四年三月三日～百日間(下之宮弁才天)

この内、安政三年の出開帳は大風雨にたゝられ、同時に開帳していた「江島縁起」五巻本及び一巻本は破損して、江戸で修理されていたことが、慶應義塾図書館所蔵・安政三年亀岳書写本によってわかる。同書は修理の際、借り受け転写したものである。

現存する〃江之島絵図〃の多くはこの開帳時に参詣者が土産物として買っていったものであろうか。鎌倉絵図は全て平面図で名所を歩くための絵図とみることができるが(詳細は拙稿〃江戸時代の鎌倉絵図—諸版略説〃「三浦古文化」第三十四号を参照願いたい)、江の島と金沢八景絵図には全景を一覧するものが多い。この時代には絵図と同様に小冊子である名所記・略縁起類も刊行されていた。調査したものを左に掲げると、

江島三社弁財天来歴　寛延二刊　半　十二丁(内題と外題は同。毎半葉八行)(国立公文書館)

同右　文化三刊　大　十二丁(内題と外題は同。右と同文にて

行款をほとんど同じくする別版）（国立国会図書館　東北大学附属図書館　岩瀬文庫　金沢文庫　三康図書館）

相州江島下宮略縁起　半　五丁（内題「相州江島弁才天下宮略縁起」。毎半葉四周単辺七行）（大阪府立図書館　東北大学附属図書館　国立国会図書館）

江之嶋大縁起五巻略記・宋朝伝来古碑略図　下之坊　半　四丁（毎半葉十二行）（東北大学附属図書館二部　神奈川県立文化資料館）

江乃嶋八景詩歌　上之宮　半　六丁（毎半葉六行）（東京都立中央図書館）

〃江之島絵図〃と右の略縁起類は一緒に販売・配布されていたものらしい。年記のない絵図の刊行年を考える際に参考になるものもあるかと思われる。鎌倉絵図各図の刊行年を考えた時に「鎌倉名所記」が役に立った。右の略縁起類の内、「江島三社弁財天来歴（寛延二刊）」は寛延二年の江の島三社弁財天の開帳の際に配られていたものゝように思われる。本書は三社の各縁起を簡潔に要領よくまとめられているので、国立公文書館（内閣文庫）所蔵本により、本文を左に全文翻字して、江の島の縁起を述べるにかえたい。本書は編脩地志備要本で、外題（内題と同題）は単辺の枠内に書かれる。

「江島三社弁財天来歴／

干爰相模国江の島大弁財天の来由を尋るに／本宮上之宮下之宮とて三所の神宮あり三社ともに／弁財天の鎮座して開基各別なり下之宮は／島の入口にあり上之宮は島の山上にあり本宮は／奥院にて嶋の南の渚岩屋のうちにあり山の頂に又／御旅所あり今通して本宮と称す関東の霊跡／なる故に諸書に載る処多しといへとも皆詳ならす（一丁オ）／

今恭く先代旧事本紀を考るに曰く／大巳貴尊興二久延彦命一幸レ奥共議聚レ金／煉二成磐岩一立二於国辺海中一而為下維二乎国一椿上／此島春一秋美咲二金花一／今陸奥国にある金花山是なり／又造二四椿一以二其一一者命二四海竜神一立二秋津国／海一維二乎中一津国一／今安芸国にある厳島是なり（一丁ウ）／

一者又是命二八洲在諸祇諸鬼一蔵二淡海国／当二後代見一／今近江国にある竹生嶋是なり／其二蔵レ之以二天諸神地庶祇等一置二於国気／八百重底一於二後世一為二人衆疑多迷時一当レ顕二／見之一是吾瑞朗中国元太岫小岫也／元太岫今駿河国にある富士の御嶽なり／小岫は江の島是なり（二丁オ）／

大巳貴尊曰此四椿者為二何神住一処一久延／彦命曰天祖諸一帝

賞乎尊ニ天照太神ニ祭ニ／其正魂ニ而名ニ富主媛尊ニ此神当降住ニ矣／大巳貴尊は三輪大明神なり久延彦命は／白鬚大明神倶に議り力を合せて右の五ケ所を／作りて我国をつなくの椿となし給ふ是を日本の／五椿と称す是吾日本を鎮るの本根なれは／いつれの神を鎮座なすへきやと相議し給ふに（二丁ウ）／久延彦命の曰く神命の分魂富主姫尊なるへし／とて終に勧請なし給ふ皆弁財天女也其中に／富士の御岳にては千眼大天女命と申厳島にては／市杵島姫命と号し奉る余は皆富主姫命と／称し奉る中にも富士を以元大岫となつけ／江の嶋を元小岫と号し給ひ国気八百重の／底にかくし置後の世の人うたかひ多く迷ふ時／あらはし給はんとの御誓願なり（三丁オ）／

人皇九代開化天皇の御宇六年己丑夏四月相模／国江の海しきりに荒れ動き数千の鬼神海上に／群りあつまり火を水に改ち風を波に発し雲を／をこし雷を将ひ潮を決り岩を斬り一つの島／一夜に涌き出つ数千の鬼神一時に去り天晴れ／浪亦静なり翠金紫紅の雲降り美音／雅楽高く聞ゆ時に金車を八竜にかけて一人の／天女乗り来り給ふ天兵神卒四辺を囲繞せり（三丁ウ）／

遠山より是を見れは日輪島の上に在す又近郷／より是を見れは美婦美童ます又島に／至りて見るに更に物なし故に怖畏て嶋に至る／ものなし或は斉戒し秡して祈るに願として／成就せすといふ事なし今年まて千九百一年に／及へり其後六百九十七年を過て人皇三十代／欽明天皇の御宇六年乙丑夏四月初巳日天女／直に大殿に出現し給ひ天皇に告て曰く吾は東方（四丁オ）／江島山なり吾天に在ては日の魂なり地に在ては富貴／財宝の魂なり名は弁財妙天女吾四月初巳には／諸の天福を将ひ降臨りて国土の万福を成就し／十月初亥には天に帰り大千を養ふなり夫天皇は／わか後胤なり初巳にはわれを迎へ初亥には吾に／餞せよ天皇是によつて勅命を下し給ひ神祠を／嶋の南の渚に立給ふ今本宮岩屋是也又初巳／初亥の祭祀此時より始れり（四丁ウ）／右こと〳〵く先代旧事本紀に見へたり／涌出より是に至て六百九十七年に及へり／其後人皇八十四代順徳院の御宇建保四年／丙子正月十三日己巳相模国江島明神託宣／ありて大海忽変して道路と成る依之参詣の／人船の煩なし誠に末代希有の神変なり／将軍実朝公其霊験を感応ありて三浦左衛門尉／義村御使として其霊地に向ふ鎌倉中の（五丁オ）／

縮素群聚をなす己巳の祭祀是よりはしまる／東鑑に見へたり

先レ是人皇四十二代／文武天皇の御宇三年己亥役の行者一言主か／讒によりて伊豆の大島に流さる翌年庚子／四月行者嶋より

遙に北海を見れは紫雲／たなひけり依之雲の起る所を尋れは江島／本宮宮座の上なり行者こゝにおゐて窟中に／とゝまる事七日不動明王の咒を念して尊身を（五丁ウ）／

影現し給ひ永く世間を利益しめ給へと丹誠を／ぬきんてられしに七日の夜窟中より香雲起り／光明赫然として天女出現なし給ふ八臂の尊躰／なり童子左右に侍立す此時行者神教を／受て鎮護国家の利益を成就せり是天女／顕現し給ふ嚆初なり大縁起に審なり／是を略す其後人皇五十二代嵯峨天皇／御宇弘仁五年甲午二月弘法大師相州（六丁オ）／

津村の湊に泊給ふ遙に南海を望み島の／風景を見給ふに忽ち綵雲山の巓に起り／金竜其中に現す大師歓喜斜ならす漁人の／舟に乗りて金窟の内に入り趺座して天女を／拝せん事を願ふ七日に及ひ寅の刻に窟中／洞朗として天女出現し給ひ梵釈左右に侍立ス／大師於レ是拝する所の尊像を刻み又秘する／ところの形像を作り岩屋内陣両部の中間に（六丁ウ）／

安置し給ふ今の秘尊是也是より大師を以／本宮の中興開山と称す其外泰澄大師安然／和尚なといつれも岩屋に参籠して霊験を／拝し神教を受給ひし事数多有之といへとも／山の道統によらす故に暫くこれを載せす又／古跡多くあり且ッ後宇多院の勅額并／宝物等多しといへとも亦しはらく是を略す／以上本宮来由（七丁オ）／

上之宮／

開基慈覚大師なり人皇五十五代文徳天皇の／御宇仁寿三年癸酉二月古人の蹤をたつねて／東海に巡行し三月相模国津村の湊に下着／して遙に南海の霊島を望み給ふに嶋の中に／三所の嶺あり恰も蓬萊方丈瀛洲の三山を／見るかことし大師恭敬合掌して島に向て／精誠をこらす時に嶋の頂に五色の雲発る（七丁ウ）／

弥信をあつくして舟に乗り島に至れは紫雲／漸く西山にうつる雲の下に岩窟あり／終に窟中に入三七日専念修行して天女の尊身／拝せんと願ふ結願の後夜にいたり竜窟の中／より紫雲起り香気山にみてり光明赫奕／として天女雲上に顕現し給ふ即八臂具足の／尊躰也童子左右に侍て囲繞す天女／妙音を以曰く吾は是安養世界のあるし也（八丁オ）／

われ跡を此島にたるゝは国民擁護のため也／天下に疾疫灵怨諸の凶事発らん時吾を／祀らは四大天王及百千の鬼神に命して／国家を護持せんと大師恐懼の思ひに堪へす／謹而神教をうけ心願満足しぬ又天女の／告によって八臂の尊像をきさみ并に乾

徳の／形像をつくり国司に告て神祠(ホコラ)をいとなまん／事を請ふ国司依レ之命して艸萊をひらき（八丁ウ）／
荊棘をはらひて神宮を山上に営み右の尊像を／安置し奉る今是を秘尊とす本宮岩屋に／神祠を立給ひしより是に至りて三百九年を歴たり／
下之宮／
慈悲上人の開基なり人皇八十三代土御門院の／御宇正治元年の頃往昔(ムカシ)の法式をとふらはんと／志を専にして修行する事一千余日に及へり／干時建仁二年壬戌七月十三日の夜寅の刻に（九丁オ）／
至て岩窟の上に紫雲たなひき岩窟の中／異香薫し光明赫々として金色曜々たり／天女檀上に出現し給ひ童子左右にはんへりぬ／天女妙音声をなして上人に告て曰く吾／むかし末世の一切衆生を度せんかために此島に／住めり汝わかために神祠をいとなむへしと／のたまひ一偈を授給ふ上人感涙(カンルイ)不レ斜／恭く神教を拝受せり上人干レ是嶺に（九丁ウ）／
登り地をえらひ神祠を造立なし給ひ／自ら尊像を刻み又天女の告によつて秘尊を／得て爰に安置し奉る今の秘尊是なり／本宮岩屋に神殿を立給ひしより是に／至て六百五十八年を経たり其後元久／元年甲子二月上旬宋に入り給ひ帰朝(キテウ)の／のち建永元年丙寅七月将軍家に請(コ)ふて／修理を加(クハ)へ荘厳美麗をつくし法式（十丁オ）／
此時に成就せり／

右江島来歴者本朝神社考和漢／三才図絵鎌倉志等に出すといへとも／いまた詳ならす其外諸家の書多しと／いへとも或は臆説多くあるは一二を／記して亦尚こと〳〵くせす依之／証跡正からす今謹而先代旧事本紀を／考へて上古涌出の正説を録す最／三社の大縁起等に載る所其正きを／採り其要を揚て漫書云／干時寛延二年己巳夏五月己巳」。

江戸時代後期の江の島の様子を示す資料として、慶應義塾図書館所蔵「江の嶋の記（文政十年菊地民子自筆稿本）」から江の島の部分を紹介したい。本書は大橋納庵室巻子の母菊地民子が文政四年四月十日から十九日迄、江戸より金沢八景・鎌倉・江の島・大山をめぐった紀行文である。この年三月より御開帳が行なわれている。四月十一・十二日は金沢扇屋、十三日は鎌倉に泊り、江の島には十四日に着いている。

「（前略）巳の刻／はかりに江の嶋なる岩本院といへるべたうの／もとに着てとばかりいこふ弁財天女の宮は／山の上にたゝせ

給ひに上の宮下の宮といへる／そあんなるこゝもかしこも戸ばりひらかせ給ひて／おがまれさせ給ふいと〳〵たふとし奥の院と／いへるにまうてんとてゆく其堂は岩かねなゝめ／にそはたちてたやすからす登りつ下りつして／児か渕といへる所にいたる白菊といへる児の／事ありて身を投ける跡なりとそ／波の色はいとこき藍に似てふかさしるへからず／けに千尋とはかゝるをやいふなるべし何と／なく物すこき物から又見所こよなし／海の面は風なきて朝にあさりする海士の／ほこらはしけなるけに何にたとへん朝びらき／なと打うたはれぬ奥の院といへるは巌にそば／たちたる洞の中を二丁はかりかほと奥ざま／に中々にそありけるいと〳〵くらし松ともして／たとりゆくにひやゝかにたるゝ清水の音たえす／岩間を伝ひたるがほの聞えたるなどおそろしき／まておほゆ浪をり〳〵に打いるゝをお掃除／浪とそいふなる岩に御仏のかたをえりたるそ／見ゆるいとたふとしぬかつき奉りて又おなし／道をたとる〳〵岩ほの中を出れは常やみの／夜はれたるこゝ地して穴おもしろと見る岩の／さま〳〵の汀にも礒にもこゝちみたれたてるに／うちよする浪の花かとまてちりかひたるは／此世の外のやうにおほえてけに人のかたりしも／しるゝたかはさりけりと心も空になりてたち／はなれかたしくるゝもしらすなかめあかしつ／山寺の鐘におとろかされてやとりにかへらんとするにも／名残りをしまれてかへりみかちなりさるはかた／ふく日影の波をやくがこと海つらにかゞやき／たるに鴈のみつよつふたつねところへゆくとて／飛かふなといと〳〵おかしうていかでなひとつ／たるとかたふき思へとかのたえなるけしきに／めてゝは口唖すとかいひけんやうにて／おしとどもりとかいふめることくあゝと打／うめきたるのみにて思ふこととをたにえぞ／つゞけあへぬぞ口をしきや其夜も友達と／ともにいといみしかりつるこゝのやうなんどを／かたらひくらすに枕にちかくひゞく浪の音は／浪たゞこゝもとによせ来といひけん浦半の／さまもかゝるにやなんど思ひよそへらるかし／そ一人とや興なる出ましに箏の音のたえ〳〵／聞えたるは心にくしよしある人の旅寝なせし／にや過し夜たり金沢の宿りにて聞しもおなじ／人ざまにやとそ思ひ出らるゝあはれにおもしろし／

浦近き旅寝の床に玉箏の／しらへも糸の波かへすらし／

などよみつゝ寝さめかちなり／十五日朝ほらけのけしきなとは心も／ことはも及ひかたきをくた〳〵しうかいつゞけんは／なか〳〵に事さまにとてもらしつこゝより／大山なる御山にまう

てんとて出たつゆきく／て藤沢といへるに着ぬ（以下略）。」

〃江之島絵図〃は調査したものをみる限り、鎌倉や金沢八景に較べ、あまりに少ない。江戸時代を通じ、鎌倉絵図は調査したものだけで五十四版、金沢八景絵図は三十版前後はあると思われるのに対し、今のところ十一、二版しかわからない。江戸末期になると、広重始め様々な画家が江の島錦絵を描いており、片瀬渡し場から正面に江の島を見た図もずい分ある。或いはこのことも、絵図の刊行数が少ないことゝ何らかの関係があるのかもしれない。江戸前期・中期のものは金沢八景同様に、鎌倉で刊行されたものが多く、後期になると地元の上之宮や絵図屋善兵衛によるものがほとんどとなる。図柄をみると、江戸中期迄のものは精粗は別として、江の島を中心において片瀬附近或いは遠く伊東迄描いているが、後期以後のものは東北方面の海上から島を大写しに描いたものばかりである。従って本論では江戸前期・中期のものと後期のものを分け、各図の解説を進めた。

一、江戸前期中期の〃江之島絵図〃

始めに各図所収の地名事項の内、江の島内のものを集めた対照表を作った。各地名は江の島入口より、下之宮（現辺津宮）・上之宮（現中津宮）・最奥の本宮御岩屋へと通常の参詣の順に配列した。

相州江嶋之図（寛文頃刊）（解題㈠）	江の嶋絵図（延宝頃刊）（解題㈡）（図版1）	江乃嶋絵図（天和・貞享刊）（解題㈢）（図版2）	「新編鎌倉志—貞享二序刊—」附図（参考㈠）（図版4）	「頭書大成節用集—元禄十一刊—」附図（参考㈡）	金亀山江嶌図—「江の嶋名所」附図（江戸中期刊）（解題㈣）
岩もといん	岩本坊	同上	巌本院	岩本坊	（絵のみ）

（江の島入口・東浜）

へんさいてん（岩本院の向かい）	弁才天（同上）	同上	なし	弁才天	なし
下の坊	下坊	同上	なし	下坊	なし
ひかしうら	東うらりやうし	同上	漁家	東うりやうし（対岸の腰越側に誤刻）	ひかしはま
岩あな地蔵堂（延命寺）	なし	なし	なし	なし	ちそう
なし	なし	なし	なし	なし	よこね石ヵ
なし	なし	なし	聖天島	なし	小天
なし	なし	なし	鵜島	なし	うしま
なし	なし	なし	なし	なし	すゝり水ヵ
えんか寺	なし	なし	なし	なし	なし
なし	なし	なし	なし	なし	哥のはまヵ

（下之宮・上之宮・本宮御旅所附近）

下之へんさい天	下宮	同上	同上	同上	下ノ宮
なし	かいるいけ	同上	無熱池	かいる也ママ	なし
なし	なし	なし	なし	なし	八月かまつヵ
なし	かいる石	同上	ガマイシ	なし	かいる石

なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし
なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし
なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし
上のへんさい天	上宮	(絵のみ)	同上	同上	同上	同上
上之坊	なし	上坊(上宮の位置に題記)	なし	なし	なし	なし
なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし
なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし
なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし
金亀山(本宮旅所付近)	同上	同上	同上	仁田抜穴	なし	金亀山
なし	なし	なし	なし	本社(本宮旅所)	なし	なし

(岩屋本宮付近等)

岩あなへんさい天(背後に「人はたゝのたいない/はゝのたい内」)	同上(背後に「ちゝのたいない/はゝのたい内」)	岩あな弁天(背後に「母のたいない/父のたいない」)	龍穴	岩あなへん天	いわや

いくう」)	なし	なし	なし	石ノとうろう
なし	ちこがふち	児かふち	児淵	ちこかふち
なし	なし	なし	なし	三天ごんけん
なし	なし	なし	なし	大こく石
りうち岩あな	りうちあな	同	竜池	りうち
なし	なし	なし	なし	せんのいわや
なし	まないた石	まな板いし	魚板石	まないたいし
なし	なし	なし	泣面崎	なし
			のたいない(誤刻カ)	
			母のたいない／父	
			なし	
			なし	
			なし	

(一)相州江嶋之図　〔寛文頃〕刊（東北大学附属図書館狩野文庫所蔵。五四×六二・四糎。四周単辺四四・八×五五・五糎）

東方向よりみた図で、中央に江の島を兜形に大きく配し、右側には対岸の片瀬と腰越を平面図的に描いている。絵図の周囲には単辺の罫がひかれ、図題は罫内上部の双辺の枠内に陽刻で記される。この図題の枠の形は本図と同様狩野文庫所蔵「相州鎌倉之本絵図（寛文頃刊　大和屋庄左衛門）」「同（寛文頃刊　高橋庄左衛門）（所蔵者未詳）」と似ているが、この両図の題額は図題・枠共に陰刻である。承応～万治頃の絵図は「新板平安城東西南北町並洛下之図（承応三刊）」「新板大坂之図（明暦三刊）」「新添江戸之図（明歴三刊）」「下野国日光山之図（承応三刊）」のように図題とその枠が陰刻のものが多い。右の「相州鎌倉之本絵図」二種は版刻が粗く、若干時代の降る寛文頃に鎌倉の地で刊行されたことが推測できる。本図はこの二種の鎌倉図より描き方は単純であるが、樹木の描き方が非常に似ている。又本図同様狩野文庫所蔵「金沢之絵図（寛文頃刊　鎌倉・冨田

屋庄兵衛)」とは図柄は似ていないが、紙目がよく似ているので、本図がこれら二図とほゞ同時代の刊行図であることがわかる。本図は山を緑、道を黄、社寺を朱に、筆彩が加えられている。東西南北の方位が刻され、紙面左には自休蔵主の詩が上方に、白菊の歌が下方に記される。上方の詩は「生国奥州忍里也／自休蔵主詩／懸崖嶮処捨生涯／十有余霜在利那／花質紅顔破巌石／娥眉翠黛接塵沙／衣襟只湿千行涙／扇子空留二首歌／相対無言愁思切／暮鐘為孰催帰家」、下方の和歌は「しら菊哥云／しら菊と忍の里の人問は思ひ入江の嶋とこたへよ／此歌は渡し守にをしへ置るゝと云へり／うき事を思ひ入江の嶋陰に捨る命は波の下草／此哥は扇子に書き置るゝといへり」。

もう少し島内をみていくと、岩本院の向いに〃へんさいてん(弁才天)〃がみられる。「新編相模国風土記稿」(以後略称「風土記稿」)の本宮旅所(現奥津宮)の項にて〃元は岩本院の前にありしと云ふ。〃、「新編鎌倉志(貞享二序刊)」(以下略称「鎌倉志」)の本社の項にて〃近年。下ノ宮・上ノ宮の外ニ。本社ト号シ山上ニ建立ス。〃と記されるように本宮御旅所が御岩屋の上にできる前の姿を示しているように思われる。次掲図以下(二)(三)・参考(二)にもほゞ同様に弁才天が記される。この本宮御旅所の古い形と思われる弁才天は、鶴岡八幡宮所蔵伝徳川光圀図「相州鎌倉図(江戸中前期ヵ写)」にもみられる。同図はこの岩本院向いの弁財天を〃下宮〃、下之宮を〃中宮〃、上之宮は通常のように〃上宮〃と記している。この〃下宮〃〃中宮〃の記載は他の例を開かない。同図の記述には前述「相州鎌倉の本絵図」二種と似たところがある。若宮大路を〃車大路〃、八幡宮前を東西に走る横小路を〃若宮小路〃(「鎌倉之本絵図」では〃わかみやずし〃)とする如くである。或いはこの写図も寛文頃の鎌倉・江の島の様子をあらわしているのかもしれない。「相州鎌倉之本絵図」は二種共に江の島を所収していないので、右の伝徳川光圀図によって未収録の江の島付近の地名を補なうことができるかもしれない。本図では、次いで〃岩本院〃と〃下之へんさい天〃の間で両者の側に、〃えんか寺〃がある。〃円可寺〃のことゝ思われるが、現在の同寺跡地は上之坊の東方にあるので、位置が異なる。この円可寺については後期図(六)に於てふれるが、当時この位置にあったのであろうか。他の資料をみる限り、上之坊東側山中にあるものばかりであるので問題がある。同寺は次掲図(二)(三)にも所収されない。この他、本図には〃岩あな地蔵(延命寺)〃も記載される。同寺は墓守念仏堂にて

上之坊の持であったが、現在ではすっかり改修されて、洞窟内の墓地になっている。同寺を所収しているところからみても、簡単に円可寺の位置を誤刻とはいゝきれないかとも思われる。御岩屋の崖上に〃金亀山〃があるが、金亀山は島の総称といわれている。江戸中期以前の絵図をみると、この位置に書かれたものばかりである。現在の〃山二ツ〃（江の島の南と北を区切る島のくびれに当る峡地）の南側本宮御旅所（奥津宮）附近の最高点を亀の首とみていたのであろうか。御岩屋の〃岩あなへんさい天〃の建物の奥に「人はたの所あり／たいないくう」があるが、「風土記稿」には諸書を引用して、岩穴の奥は二つに分れ〃金剛界〃〃胎蔵界〃の二つの洞があることを記している。前述「江島縁起」一巻（享禄四年原奥書）（慶應義塾図書館所蔵）に「（略）安然秘所記曰／西嶋山者名二女婦石一是即女天、胎蔵界会／也、嶋西一南之岸有二巖窟一、名二金窟一、自二窟中一／時一々放二金光一、是故名二金窟一、々内院二重也、於二内／院一又有二窟一、東窟安二胎蔵界曼荼羅一、西／窟安二金剛界曼荼羅一、弁才天座二其中／央一、左座竜樹菩薩、右座徳善大王、其所／安瑠璃壇、々上安二置法華経一部一（以下略）」と書かれるように、東の洞を胎蔵界（女）、西の洞を金剛界（男）に比定して、後掲図㈡㈢・参考㈡では〃父の胎内〃〃母の胎内〃と書かれる。本図は狩野文庫所蔵図のみが知られる。前田元重氏の解説で「三浦古文化」にて影印される予定であるので、本稿では図版を省略した。

㈡江の嶋絵図〔延宝〕刊　鎌倉・松尾七左衛門（三井文庫所蔵四七×六六・二糎）

前掲図が江の島を東海上よりみて大きな山形に描いていたが、本図と次掲図はより高い視点で見おろした鳥瞰図式に変っている。又、島の周囲には対岸の片瀬・腰越だけでなく、遠くは伊豆の伊東・伊豆権現、更に富士山・箱根・大山不動・日向薬師の山々がとりまくように配されている。その他、御岩屋上の金亀山附近の道には旅人三人、西方の伊豆権現附近の熱海道には主従三人づれの旅人、海上には漁師の乗る舟が描かれている。本図には前掲図とは違い、四周の罫がない。図題は前掲図同様、上部の双辺枠内に書かれる。方位も同様である。本図は上下二版木でできているらしく、上下に版の継ぎ目がみられる。右下に刊記があり「鎌倉雪下宮ノ前／松尾七左衛門板本」。この版元は旅館を営んでいた家である。三井文庫には雪の下松尾某（名前の部分は欠損）の刊行した「鎌倉絵図（延宝六刊）」をも

所蔵する。本図同様に舟や人々が描かれており、同じ頃のものであろう。左下には白菊の歌が書かれ、「白菊としのふの里の人とはゝ／おもひ入江のふちとこたへよ／右はしら菊と申ちこ鎌倉人也此うみに入たもふ／しら菊の花の情のふかきうみに／友に入江の嶋はうれしき／右はしのふの里の坊也けんちやう寺にすみたもふ」。紙背には墨筆にて題が書かれ「寛文十（抹消の跡あり）／江嶋絵図」。鎌倉絵図をみると、京都で刊行されたと考えられる「相州鎌倉之図（明暦・万治頃刊）（前述の承応～万治頃に刊行された図と同版式）」・「相州鎌倉之図（寛文・延宝刊）（小図）」と前述「相州鎌倉之本絵図（寛文頃刊）」二種には全く人が描かれておらず、右の延宝六年松尾版以降に書き入れられたことがわかる。金沢八景絵図の内、寛文・延宝頃の刊行図には「金沢之絵図（鎌倉・冨田屋庄兵衛）」（狩野文庫、神奈川県立文化資料館印後）、「金沢之絵図（鎌倉雪の下某版）」（金沢文庫）がある（詳細は前田元重氏〝金沢八景絵図考〟「三浦古文化」第三十三号を御覧願いたい）。題額は前者が陰刻、後者は陽刻（装飾のない単辺枠内）であるが、本図はいずれとも似ていない。山や人の描き方もこの両版とは異なってみえる。本図と次掲図は〝岩本院〟を〝岩本坊〟と古様に呼んでいる。現存の文書をみると、享徳四年古河公方感状以来、室町江戸初期を通じ〝岩本坊〟になっているが、慶安二年「仁門跡御本寺請文草案（真光院宛）」頃より、〝岩本院〟の院号を使い始め、慶安末年頃からは差出・受取状共に院号に一定化されている。本図の坊号は絵図の成立時を引き上げるほどの意味はなく、一般の人は岩本院側の院号を使う意志とは別に旧来通り〝岩本坊〟と呼んでいたことを示しているのかもしれない。江の島内の記述を前掲図と比較してみると、円可寺がなくなっている。御岩屋の奥には右に「父のたいない」、左に「母のたいない」が記される。前掲図にて述べたように東窟は胎蔵界、西窟は金剛界より考えられた比喩であろうが、東西が逆になっていると思われる。下之宮下に、〝かいる石〟〝かいる池〟があるが、江戸後期以降の絵図では〝蝦蟆石〟〝無熱池〟となる。安政二年の「江の島紀行（李院女）」、天保六年の「四親草（独芳亭松雨）」等をみると〝かへる石〟〝かへる池〟の名がある。江戸期を通じて、この石と池にはやゝ重みのない〝かへる〟の名が俗称されていたのであろう。本図と次掲図は前掲「相州江嶋之図」に較べ、表現に固さがなく、どこかのんびりした感がある。金沢八景の右二図のように遊覧地を明るく描いているのであろう。

山の松の木の形をみると、「相州鎌倉之本絵図（寛文頃刊　大和屋庄左衛門）」と一派通ずるものが感じられる。さほど時代に差がないのかもしれない。前掲図と相対する別図柄の絵図であるのは競争相手を意識して刊行したものであろうか。（図版1）

㈢江乃嶋絵図〔天和・貞享〕刊（長沢規矩也氏所蔵三四・二×四七・一糎。四周単辺二九・五×四四・六糎）

前掲図より一まわり小さい絵図で、図柄も所収事項もほとんど変らず、旅人等人の姿もほゞ同様に描いている。しかしながら本図は四周単辺の罫内に書かれ、上部の単辺の枠内には図題がある。前掲図と異るところをみると、御岩屋奥の二つの洞の名称が左右逆になり、東が〃母のたいない〃、西が〃父のたいない〃になっている。前述の諸資料をみると、本図が合っているようである。又、三社をみると、前掲図の〃上宮〃の題記が〃上坊〃に変っている。島の周囲の舟の形・位置が変り、対岸の竜口寺〃日蓮土のろう〃内に建物が描かれている。本図の左下には前掲図同様に白菊の和歌があり「白菊としのふの里の人とはは／おもひ入江の渕とこたへよ／是は白菊とてかまくらの児成しか此海にいりむなしく成／白菊の花の情のふかき海に／友に入江の嶋はうれしき／右はしのふの里の坊也けんちやうじ／住給ふ」。本図は前掲図にてふれた「金沢之絵図（鎌倉雪之下某版）」とは、題額の形式・樹木（松・大木・花樹）の形・遠方の山景色の描き方がよく似ているので、作者が同じかもしれない。刊行時も本図が若干新しい程度かもしれない。本図には版元名が刻されないが、前掲図同様に、松尾や冨田屋等の鎌倉の旅館で刊行されたものであろう。前掲図より若干時代が降ると思われる。菱川師宣「和国名所鑑（天和三刊　江戸・山形屋　大）」（図版3）にも江の島・片瀬両側の渡し場を描く絵が所収される。本図とほゞ同時代であろう。樹木の中に本図に若干似たものもある。絵の上眉に書かれた〃相州江之嶋〃の詞書を当時の様子を示す資料としてこゝに紹介したい。

「えのしまのべんざい／てんと申たてまつるは／我てう三べんざい天／のうち也あきの宮／嶋のべんざいてんあふ／みのちくふしま相州／えのしまとて是三つ／のれいぶつなり海／のほとりに夜の内に／しゆつげんしたる山／なり下のみや上の宮／岩あなのべんざいてん／とて三所に立給ふ也／岩もとのべんざいてん／海上まん〳〵たるいわの／きしにありそれゟ／していわあなへ入る／さんけいのたうしやた／いまつをとほして／せん

たつをたのみ穴へ／入也此岩もとのなみ／うちきわにてあま共／あわびをとる猟師あみをおろしてれう／をするおもしろき所也（以下略）」。（図版2）

㈣金亀山江嶌図〔江戸中期〕刊（金沢文庫所蔵二三・七×六八・二糎）

「江の嶋名所（一枚刷）」の所収図で、右側には題記についで十三行の案内記が書かれ、その左には上部に題記の書かれた絵図（約四十糎）が配される。本図は東の海上より島をみて、御岩屋から東浜を正面に描いている。前掲㈠～㈢より刊行年代は降り、下之宮には杉山検校が元禄六年に建立した三重塔がみえる。版式からみて、宝永・正徳頃に刊行されたものと思われる。筆彩にて山に緑、建物に朱がほどこされる。上部の題記左には白菊の句があり「白菊と／忍ふの／さとの／人と／はゞ／思ひ入江の／嶋と／こたへ／よ／うきことを／思ひいりえ／の嶋かけに／すつる命は／浪のしたくさ」。本図は地方版のせいなのか、判読できない地名が多い。御岩屋周辺に〃大黒石〃がある等、本項始めの〃地名対照表〃をみるとわかるように、他図にない地名が多く所収される。本社御旅所は岩本院前より、御岩屋背後山上に移っている。御岩屋の東方の竜穴、山二ツ東方の蓮華池があるように、前掲各図より細かい地名が書かれている。右側に配された「江の嶋名所」は入口の茶屋町から下之宮・上之宮・御岩屋と通常の巡路に従い島内の名所をたずねている。今その内、三社を参詣する部分を抜書きすると、

「（略）こゝに仁王門有り。三重／のとうあり。いなり山。ごつてんわうの宮。又ごふく石有。ほうそうの神石のとりい。此坂を上り。ゆずいじん門有り下のみや弁才（ママ）は開山ぢひ／上人の御作本地によいりんくわんおんつきがねだう。ひのもん石。十／五社の宮あり。本地だう。ごまだう有。東町にしやうでんの山。見へる／上りてかうか門有り。上の宮弁才天はぢがく大師の御作。本地みだ／によらいなり。いなりの宮。ほうそう神。ごまだうぢぞうだう。石のと／りい。ららもん。二王（ママ）もんかりやの宮あり。大しどういなりの宮。ぐもんし／だうつきがねだう。しやうくわんおんのだう有。（略）」。これにより当時の各社の様子がわかる。

参考㈠江島図―貞享二序刊「新編鎌倉志（京都・茨城多左衛門大）」附図

対岸の片瀬を下に平面図式の絵図である。同書の本文通り、本宮御旅所は岩本院向いではなく、御岩屋（竜穴）崖上に建てられ、本社と書かれる。平面図式であるので、島の中央部の表と裏を分ける括れ（山二ツ）がわかる。次掲図と江の島の形は似ているが、本図では対岸の記入をほとんど省略している。人物は全く描かれないが、島の西側には帆掛船二艘がある。他図では各社の別当の岩本院・下之坊・上之坊があるが、本図では下之宮に本殿の他に鐘楼・碑石をも描いているにもかゝわらず、別当については岩本院だけで上之坊・下之坊は全く書かれていない。本書は明治迄、版木が残り刷り続けられたので、数種の年記の異なる後刷本がある。正徳三年奥付本・京都山田茂助明治後印本・明治三十四年岐阜三浦源助後印本は全て貞享二年序刊本の同版・後印本である。（図版4）

参考㈡江之嶋図―元禄十一刊「頭書大成節用集」二種の附図

「頭書大成節用集」は刊行年を同じくする万屋清兵衛版（単辺六行本）と須原屋茂兵衛版（単辺七行本）の二種（両版共に美濃判）がある。両者共に見開き半葉の大きさで「金沢之図」「鎌倉之図」「江之嶋図」の三図を所載する。両版共に三図は全く同図柄で、かぶせ彫り関係にある別版である。各図の所収事項も又ほゞ同一である。万屋清兵衛版所収「江之嶋図」は若干絵図の線が太く、江の島の樹木の描写がていねいで枝数も多い。この両版は本文の底本を異にしているが、附図の三図はかぶせ彫り関係にあり同図柄であるため、こゝにまとめて解説する。本図は単辺の罫内に描かれ、図題は上部の単辺枠内に書かれる。前掲「鎌倉志」所収図と図形が同様で、島の西海上に帆掛船が二艘ある。しかし、その周囲は前掲松尾版㈡及び㈢同様に伊豆の伊東より島をめぐる形に描かれ、旅人も似たような位置にいる。松尾版の内容をコンパクトにし、図柄を前掲「鎌倉志」所収図に似せたような感じである。しかし、本図は東浜漁師町辺を不自然に大きくしている。従って所収地名は前掲㈡及び㈢とほゞ同ようであるので、岩本坊向いに弁才天（当時はすでにないはず）があり、〃岩あな弁天〃上に「金亀山」と書かれる。本図には江の島の旧態も記されるが、誤刻も多い。右の本宮御旅所の前身と思われる弁才天は東の海岸辺りに書かれ、松尾版㈡及び㈢に書かれていた「東うらりやうし（東浦漁師）」は対岸の腰越小動岬附近に「東うりやうし」と記され、本宮岩屋奥にあるはずの「母のたいない／父のたいない（両胎内の位置のみ

は前述(二)と同様)」が竜池と思われる窟内に記され、伊豆権現を相模湾内の海上に島様に描かれるように、小さい図面の中には誤刻が多い。地理を知らない人が書写・再編しているうちに、図柄を立派にする方に熱が入り内容の正確さは二の次になったせいかもしれない。次に本図所収の両版について若干ふれたい。

(1)頭書大成節用集　元禄十一刊　江戸・万屋清兵衛　大（静嘉堂文庫所蔵）

本文は四周単辺有界、毎半葉六行。巻末刊記は「元禄十一戊寅歳江戸日本橋万町中通角万屋清兵衛開板」。本文付載の「本朝年号略記」中に「…元禄四年辛未迄…」の記述があるので、元禄四年に本書は編纂されたものと思われる。所収附図の「江之嶋図」も左の須原屋茂兵衛版よりていねいであるのは、左記の版の原図或いは原図に近い図のせいであろうか。金沢文庫には本書より「江之嶋図」を切りとった一葉が所蔵される。

(2)頭書大成節用集　元禄十一刊　江戸・須原屋茂兵衛　大（国立国会図書館亀田文庫所蔵）

本文は四周単辺、有界毎半葉七行。前掲書とは行款を違えるだけでなく、底本が異り収録語順も異なる。巻末刊記は「元禄十一歳戊寅正月吉旦／江戸日本橋南一丁目書林須原屋茂兵衛板」。前掲書とは附載編もかなり異なる。その内、「本朝年号略紀」中に「…元禄十年迄…」があるので、本書は刊行年の前年にできたものかもしれない。従って本書所載附図の三図は前掲万屋清兵衛版をかぶせ彫りにして作られたものであろう。本書は元禄十二年に同版にて修印されている（同亀田文庫所蔵）。三井文庫には本書から附図三図のみ切りとった三葉が所蔵される。同版であるが「金沢之図」の左すみに元禄十四年の刊記が刻されている。本書の後刷にてその刊記を追刻したものであろうか。亀田文庫本は保存状況が悪く、この三井文庫図を使用しないと各所収事項の判読は難しい。

二、江戸後期の〝江之島絵図〟

江の島入口銅鳥居東側に住む絵図屋善兵衛が「江之島金亀山細見之図」を刊行してから、江の島を大写しに描いた図柄が以後の〝江之島絵図〟の主流となったものと思われる。本項では、図柄の類似したものをまとめ解題を配したので、各図の順位と時代順には少し異なるところがある。江戸前期・中期の項と同様に、解題の前に次掲七版の所収地名の比較表を配した。前表同様に、江の島入口・東浦漁師町・下之宮・上之宮・本宮御旅所・本宮御岩屋の通常の参詣順に各地名を配列した。

絵図屋善兵衛版（初版ヵ）（解題㈤）（図版5）	絵図屋善兵衛版（文化五刊）（解題㈥）（図版6）	松寿軒版（江戸後期刊）（解題㈦）（図版7）	上之宮版ヵ（吉田蘭香画）（解題㈧）（図版8）	上之宮版（並寅君賓画）（解題㈨）（図版9）	上之宮版ヵ（江戸末刊）（解題㈩）（図版10）	江戸後期刊鳥瞰図（解題㈠）（図版11）
（江の島入口附近）						
かたせ村わたしば	かたせわたしは	同上	渡しばかた瀬（後修図―渡しば）	わたし場	かたせわたしば	なし
銅鳥居（絵のみ）	（絵のみ）	（絵のみ）	銅鳥居	同上	同上	（絵のみ）
西方□	西方寺	西方庵	なし	なし	なし	なし
町屋	両かはとも茶屋町	茶屋町	町屋	同上	同上	（絵のみ）
岩本院	同上	同上	同上	同上	同上	（絵のみ）
住吉（絵のみ）	住吉	同上	同上	同上	同上	なし
下之坊（下之宮別当）	下の坊	下之坊	同上	同上	同上	同上
（東浜・漁師町）						
延命寺	同上	同上	なし	なし	なし	なし
漁師町	りやうし町	同上	蠟師町	猟師町	同上	（絵のみ）

(判読できない)	なし	なし	なし	なし	なし
聖天島	同上	同上	聖天嶋	同上	聖天島
鵜の嶋	同上	鵜之嶋	鵜島	鵜の嶋	鵜島
円可寺	同上	同上	(推定しうる建物の絵)	同上	同上

(下之宮—現辺津宮)

二王門	仁王門	同上	二王門	仁王門	同上
荒神	三宝荒神	同上	荒神	同上	同上
八大竜王	同上	同上	八大竜王	同上	同上
がま石	同上	同上	蝮石	蝦蟆石	同上
無熱池	同上	同上	同上	同上	同上
なし	百度冢	同上	なし	なし	なし
三重塔	同上	同上	同上	同上	なし
エンマ堂	なし	なし	なし	なし	なし
イナリ	なし	なし	稲荷	稲荷宮	同上
杉山之ハカ	杉山検校之墓	同上	なし	なし	なし
福石	ふく石	同上	福石	同上	同上
なし	疱瘡神	同上	同上	同上	同上

宮守松	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし
随身門	ずゐじんもん	同上	随身門	同上	同上	同上	同上
なし	しめ引松	志め引松	なし	なし	なし	なし	なし
末社	なし	なし	末社	同上	同上	同上	同上
本地堂（上之坊への口）	なし	本地堂（碑石の向って左）	なし	なし	なし	なし	なし
なし	十宮神	同上	同上	同上	同上	同上	同上
経ヵ堂	なし	経堂	なし	なし	なし	なし	なし
開山堂	なし（上之宮境内に誤刻）	開山堂（絵図屋初版所収同堂の隣り）	なし	なし	なし	なし	なし
碑文石	宋よりわたりしせきひ	宋より伝来の碑	碑石／銘大日本国江島霊迹建寺之記	同上	同上	同上	同上
護摩堂	ごま堂	同上	護摩堂	同上	同上	同上	（絵のみ）
下之宮	下の宮	下之宮	同上	同上	同上	同上	同上
十五童子	同上	同上	同上	同上	同上	同上	（絵のみ）
鐘楼	しゆろう	同上	鐘楼	同上	同上	同上	なし
御供水	同上	同上	同上	同上	同上	同上	なし

（上之宮―現中津宮）

楼閣門	楼門	同上	楼閣門	同上	同上	(絵のみ)
なし	なし	なし	疱瘡神	同上	同上	なし
十一稲荷ヵ（判読できない）	十一いなり	同上	十一稲荷	同上	同上	なし
なし（以下の図では護摩堂の位置）	本地堂	同上	同上	なし（同位置に護摩堂）	本地堂	なし
護摩堂（以下の図では本地堂の位置	護摩堂	同上	なし	護摩堂	なし（同位置に本地堂	なし
上之宮（絵のみ）	上の宮	上之宮	同上	同上	同上	同上
（絵のみ）	しゆろう	同上	鐘堂	同上	同上	なし
（絵のみ）	（絵のみ）	（絵のみ）	銅鳥居	同上	同上	（絵のみ）
（絵のみ）	茶屋	同上	（絵のみ）	（絵のみ）	（絵のみ）	（絵のみ）
（絵のみ）	（絵のみ）	（絵のみ）	石鳥居	同上	同上	（絵のみ）
上之坊（上之宮別当）	上の坊	上之坊	上の坊	同上	同上	（絵のみ）
なし	一へん上人成就水	なし	成就水井	同上	同上	なし
蓮花池	なし	なし	蓮花池	同上	同上	なし
なし	山二つ	同上	なし	なし	なし	なし

（本宮旅所―現奥津宮）

（絵のみ）	（絵のみ）	（絵のみ）	銅鳥居	同上	（絵のみ）
（絵のみ）	（絵のみ）	（絵のみ）	石之鳥居	石鳥居	なし
本地堂	開山堂	同上	同上	同上	なし
楼門	同上	同上	同上	同上	なし
（判読できない）	求聞持堂くはんをん堂（建物は一つ）	求聞持堂くわんをん堂（建物は一つ）	求聞持堂、観音堂（別々の建物）	求聞持堂、観音堂（建物は観音堂のみ）	（建物一つあり）
本宮御旅所	御旅処	御旅所	本宮旅所	同上	同上
（絵のみ）	しゆろう	同上	鐘堂	同上	同上

（本宮岩屋附近）

なし	茶屋	同上	同上	同上	同上
本宮岩屋	同上	岩屋	本宮岩屋	同上	同上（後修図―岩屋）
児ケ渕	ちごがふち	同上	児が渕	児ケ淵	同上
なし	海上めあてのとう	（絵のみ）	なし	なし	なし

	なし	ろう				
		南郭（服部）先生詩碑	（絵のみ）			
	なし	ばせをづか（潮墳）	（絵のみ）	なし	なし	なし
	三天	同上	同上	同上	同上	なし
	魚板石	まないた石	同上	魚板石	同上	（絵のみ）
	竜池	同上	同上	同上	同上	同上
（江の島外）						同上
	姥嶋（島の左）	うば嶋（島の右）	同上	なし	なし	なし
	冨士山（島の左）	（絵のみ）（島の右）	同上	（絵のみ）（島の右）	冨士（島の左）	同上
						乳母島（島の上方）（推定しうる高峰あり）

㈤江之島金亀山細見之図〔寛政以前〕刊　江の島・絵図屋善兵衛（長沢規矩也氏所蔵三二・九×四七・六糎）

右の各図と変り、両面いっぱいに江の島を描き、正反対の位置にあるため、実際には互いに見えないはずの島の入口の茶屋町と島の裏側の御岩屋の両者が正面を向いている。以後、明治末迄この図柄を踏襲した絵図の刊行が続けられる。図面の右側に図題が記され、左下に刊記があり、「江之島絵図屋善兵衛板刻」。四すみには方位が対角線の位置に刻される。版元の絵図屋善兵衛は江の島入口銅鳥居横で絵図を販売していた店で知られ、現在も同位置で絵図屋堀江商店と号して土産物店を営なま

れている。御活躍しておられる堀江善次氏は失われた絵図屋の資料を熱心に蒐集されている。鎌倉絵図の版元にも絵図屋半兵衛（享保・元文頃の版）と絵図屋弥左衛門（寛政・文化頃の版）の二人がみられる。この両者を以前から絵図屋の一族とばかり思い込んでいたので、堀江氏にたずねたところ、全く存知ないとの由であった。本図は次掲図(六)の序文により、寛政七年以前に刊行されたものと考えられる。調査した長沢規矩也氏所蔵図をみると、印刷面が何かしっくりせず、いかにも地方で印刷（版木彫工は江戸ヵ）された感が強い。若干後刷のせいなのか、墨がにじみ判読できない地名が多い。以前の絵図では島内の地名は十代程度であったが、本図には五十余が書きこまれている。下之宮・上之宮・本宮御旅所の各境内建物が本図から細かに書かれるようになる。本図は次掲図文化五年刊行図と若干異なるところがある。それらをみると、より古様の姿を示しているようにも考えられる。下之宮では三重塔左に〃エンマ堂〃、同宮より上之宮への道口に〃本地堂（後掲各図では〃十宮神〃の位置）〃、本宮御旅所の楼門脇に〃本地堂〃（後掲各図では〃開山堂〃）があるのは他と異なる。文化・文政の調査と思われる「風土記稿」をみると、下之宮〃閻魔堂〃は三重塔の右、同〃本地堂〃は社殿寄りの護摩堂近くにある。又、文化年間の調査と思われる「五海道分間延絵図」所収図をみると、本宮御旅所の〃開山堂〃は〃観音堂〃より社殿よりにある。「十方庵遊歴雑記」（文化六年の項）には本宮の側にあると記される。これらの違いは以前の様子を示しているのか、絵図作成上の単純化によるせいか、誤刻なのか今のところわからない。稚児ケ淵上に芭蕉句碑がないのは寛政九年建立以前の図のせいであろう。本図はすでに〃三天〃に注縄がかけられている。左下の刊記のとなりには前掲各図同様に、白菊の和歌があり「しらきくとしのふのさとの人とわは／おもひ入江のしまとこたえよ／白菊／しらきくの花のなさけの／深き海に／ともに入江の島そうれしき／自休□」。富士山と姥島（鳥帽子岩）が江の島の左に描かれる。「風土記稿」に「西方乳母島に至る迄を当島の持とす」と記される。それを意図したのであろうか。同島は後述吉田蘭香図(八)以下三図(九)(一〇)を除く各図にみえる。以下各図の詳細な所収地名は本項始めの〃所収地名表〃を御覧願いたい。（図版5）

(六)江嶋一望図　文化五刊　江の島・絵図屋善兵衛（長沢規矩也氏　金沢文庫　堀江善次氏　家蔵　三康図書館　神奈川県立文

化資料館修後所蔵）

前掲図と同様の図柄である。但し、冨士山と姥島は島の右側に描かれ、方位は省略されている。図題は上部に、双辺の枠内に書かれる。本図には右上に序文があり、それにより絵図刊行についての経過がわかる。（　）内の年号は今便宜上補記した。「僕が家島中の図を売るを以て号して絵図屋／といふ寛政乙卯（七年）の歳火災に羅りて其鏤板を／失ひしを江戸千葉君沙橘尼新に板を刻さし／め僕が家に恵投して家産を賑はしたまへりし／かるに客冬（文化四年）十一月其板もまた灰燼となれり因て／更に千葉君に請ひ鏤版旧のごとくなりて四方／来游の諸君子にひさく此図に拠りて島中／を巡覧したまはゞ遺るところなかるべしなほ／其来由を識んと欲せば別に一冊子あり照しよみたまふべし／　絵図屋主人欽白／文化戊辰（五年）四月」。左下の双辺枠内には刊記があり、「えのしま入口左がはかど／絵図屋善兵衛版」。その左下に刻工名が刻され「彫工江戸市かゝ谷　江川」。この序文により、絵図屋では寛政七年・文化四年の両度に焼失した二版と新しい版木を合せ、当時すでに三版の絵図のあったことがわかる。千葉沙橘尼についてはわからない。文化四年十一月の火災は「十方庵遊歴雑記」にみえる、えびすや茂八が火元のものであろう。前掲図は版式よりみて、寛政七年に焼失した初版図と考えられる。前掲図・本図・次掲図には島の西岸にある墓所の守堂である西方寺（庵）と東岸にある同様の延命寺、更に円可寺がある。円可寺は「風土記稿」には「古義真言宗、手広村青蓮寺末にて山中の香花院なりしが、近き頃廃絶せりと云ふ」と記される。「江島大艸紙（釈因静編。宝暦九刊）」「寛政新編名所案内江嶋詣（星運堂刊）」「十方庵遊歴雑記（大浄敬順著）（文化六年八月の項）」「四親草（松雨著）（天保六年紀行）」には円可寺の存在が書かれている。「十方庵遊歴雑記」には「東の山腹に円可寺といえる小地あり。密宗にして実に幽閑寂寥松会の音に和して、遙かに波の響きを聞くの勝地たり。」。「四親草」にも似たような記載があるが、同書は「風土記稿」より時代が降る。同書には「寂寞幽閑の地也と聞けり」と書かれるので、実際にみたのではないのであろう。次掲図にも同寺はあるので、文化以降まで存在していたのかもしれない。本図のみ、上之宮社殿裏に開山堂がある。前掲図(五)と次掲図(七)と本図を比較してみると、下之宮社殿左にあるものを誤って上之宮境内に書いてしまったことがわかる。〃杉山検校百度塚〃は本図と次掲図のみにある。本図より始めて記載されたものに寛政九年三

月建立の芭蕉句碑（潮墳）と文化二年十二月建立の服部南郭詩碑がある。芭蕉の句碑「疑ふな／潮の花も／浦の春／はせを」は「いつを昔（元禄三刊）」所収句で、同書には句の前に「二見（ふたみ）の図を拝み侍（はべ）りて」が記される。この句は二見文台の裏に真蹟（「元禄二仲春」の年記）があるので有名である。三天の注縄は二見ケ浦の句碑を建立したために、かけられたようにも考えられるが、句碑建立以前の図と思われる前掲図(五)及び吉田蘭香図(八)にもみえる。注縄が先きだとすれば、むしろ注縄のかかった岩があったので、この二見ケ浦云々の注ある同句の句碑を鎌倉・江の島等の俳人たちが助縁して造ったのかもしれない。今のところ、正確な記録がないので何ともいえない。本図の図柄は右に述べたように料紙の大きさからみると前掲図絵図屋版と似ているが、片瀬寄りに渡し舟・入口の銅鳥居前や魚板石附近に人がおり、島の右手に冨士山・姥島のあるところは、むしろ後述吉田蘭香図(八)に近い。むしろ前掲図(五)の大きさで、より大きい吉田蘭香図を参考にして作ったと考えるべきであろうか。本図の序文中に「…其来由を識んと欲せば別に一冊…」がみえるが、その一冊は刊行年代からいって前述の文化三年刊「江島三社弁財天来歴」ではないだろうか。もしそうだとすれば、同書には寛延二年刊本（前述翻字）もあるので両版共に絵図屋善兵衛の刊行であることも考えられる。本図の稚児ケ淵下には前掲図同様に白菊の和歌があり「しらぎくとしのぶの里の／人とはゞおもい入江の／しまとこたへよ／しら菊の花のなさけの／深き海にともに入江の／しまぞうれしき」。巻末の図版は家蔵図（三二×四五・五糎）を使用した。（図版6）

神奈川県立文化資料館所蔵図は同版ではあるが、若干後印で鵜の嶋の左右の波が少しなくなり、竜池前にいる釣人がいなくなっている。版木が痛み、細かい部分がきれいに刷り込めなくなったので、その部分をけずりとったのかもしれない。

(七)江嶋一望図　〔江戸後期〕刊　江の島・松寿軒（神奈川県立文化資料館　金沢文庫　長沢規矩也氏所蔵）

前掲図絵図屋版(六)の粗い覆刻と思われ、図題・図形・所収地名もほとんど一致する。左下の刊記は同様に双辺枠内に「江のしま／松寿軒蔵板」。冨士山・姥島の位置も同様に島の右手にある。前掲図(六)では題字も書かれていた〝海上めあてのとうろう〟〝南郭先生詩碑〟〝ばせをづか〟は絵だけになっている。その他前掲図と異なる所収地名をみていきたい。下の宮の社殿

周辺をみると、左より〃経堂〃〃開山堂〃〃本地堂〃〃碑石〃〃護摩堂〃〃社殿〃の順に並んでいるが、絵図屋版㈤では〃経堂〃〃開山堂〃〃碑石〃〃護摩堂〃〃社殿〃、前掲図㈥絵図屋文化五年版では〃開山堂（上之宮境内に誤刻）〃〃碑石〃〃護摩堂〃〃社殿〃とそれぞれ異っている。文化五年版の所収堂舎が少ないのは次掲図吉田蘭香図㈧をもとにしているせいだろうか。下之宮墳内は絵図屋版㈤に少し似ており、〃西方寺〃を〃西方庵〃としているところをみると、本図は前掲図文化五年版より古様にも思われる。しかし〃本宮御岩屋〃を〃岩屋〃にしたり、〃蓮華池〃〃一遍上人成就水〃や竜池前の釣人をなくす等、省略したと思われるところがいくつかある。所収事項だけみると前掲図㈥より古そうにみえるが、版式・紙質をみると、時代が降っていることがわかる。本図の鵜の島周辺の波の形や竜池前の岩の形は前掲図㈥の内、後修図である神奈川県立文化資料館所蔵図によく似ている。更に全島岩山の輪郭線は前掲図と大体合っているものゝ、直線的でやゝ固さが感じられる。よって本図は前掲文化五年版の修印図をもとにして、若干の訂正を加えて作られたように思われる。その際、細かい山ひだ等の手間のかゝるところを省略したのであろうか。長沢規矩也氏所蔵図はかなり後印である。ずい分刷られていたのだろう。本図の蔵板元である松寿軒については全くわからない。狭い島の中で絵図屋版の絵図を使ってそっくりに新しい版を作ることのできる版元なので、絵図屋善兵衛と近い関係にある人かと思われる。巻末の図版には神奈川県立文化資料館所蔵図（三一・五×四七・五糎）を使用させていただいた。（図版7）

㈧江之島金亀山三宮細見之図　吉田蘭香画〔江戸後期（寛政頃）〕刊　上之宮蔵板ヵ（三井文庫　長沢規矩也氏旧蔵）　江の島神社　神奈川県立文化資料館所蔵）

調査した絵図の内、唯一つ画家の伝のわかる図である。江戸の本職画家が描いた絵図だけあり、絵図屋両版㈤㈥より一まわり大きい料紙いっぱいに島が描かれ、三社各社の建物が堂々と並ぶだけでなく、江の島の右側に大きく聳える富士山・海上の船三艘（漁師の小舟ではなく大舟）をみると、他の絵図とは全く違う画趣が感じられる。絵図屋版㈤にはみられなかった渡し場の待人・渡し舟の人々・入口の茶屋町と各社の境内の人々・魚板岩辺に遊ぶ人々は本図より描かれるようになったものと思われる。絵図屋文化五年版㈥には拙稚な筆致でほゞ同位置に人

物がいるが、本図をもとにして作ったものではないだろうか。同図と松寿軒図(七)には島の入口銅鳥居下に階段がないのは簡略化したせいであろう。文化五年版(六)と本図以下三図には下之宮等各社境内の建物が少ない。それとは逆に、本図のみ他図とは異なり本宮御旅所に観音堂と求聞持堂の建物が別々に描かれている。実際には別々に堂があったのだが、他図は紙面の制約があり、省略したのであろう。又、本図以下三図には前述の〃円可寺〃の題記がない。少くとも本図の刊行の頃には存在したと思われる。上之坊の東に山に隠れぎみの建物が一つあるが、題記はないものゝ、〃円可寺〃のつもりかもしれない。西方寺・延命寺の両寺のないのは、絵に力を入れたため、書き入れる余白がなくなったせいであろうか。本図以降、上之宮と本宮御旅所の間に〃蓮華池〃と〃成就水井（一遍）〃の両者が書かれるようになる。本図の図題は右上に縦書きで「江之島金亀山／三宮細見之図」、筆者刻記は右下に「東都牛門処士／吉田蘭香図之寄附（印刻）」、刻工記は左下に「東武　斉藤氏杉朝彫刻」と記される。筆者の吉田蘭香（東牛斎）は東睿山清水堂に扁額「坂上氏征二鈴鹿一」のあることで知られ、寛政十一年六月九日に没している。本図の稚児ケ淵崖上に芭蕉句碑（寛政九建）と服部南郭詩碑（文化二建）がないのは、この絵がより以前に書かれたせいであろう。本図は絵図屋版(五)同様に四すみに方位が刻される。三天の注縄は描かれる。〃江之島絵図〃各版にみえた白菊の和歌は本図には全くない。本図の早印図には「上之宮蔵板」と同社の陽刻と陰刻の朱印二種（初印と思われる三井文庫所蔵図は別の朱印一種のみ）が押印される。右の三井文庫図（四〇・二×五六・七糎）の上之宮の蔵板印は藍墨で刷られる。長沢規矩也氏所蔵図の一図には図題右に陰刻朱印記「金亀山」が押され、一図には蔵板印を押した紙が貼られている。やゝ後印にみえる神奈川県立文化資料館図には右の印記はいずれもない。初印と思われる三井文庫図と他図と比較してみると、江の島内には異動はないが、片瀬側の渡し場にある単辺枠内の「渡しば／かた瀬」が後印図ばかりでなく比較的早印と思われる長沢規矩也氏所蔵図の一図（巻末図版8）に於いても、すでに枠と左行の「かた瀬」が版木からけずりとられていることがわかる。これがどういうことを意味するのか、よくわからない。絵図屋文化五年版(六)と同様に江戸の彫工名が記されているので、江戸で版木ができたことがわかる。〃江之島絵図〃の各版木は鎌倉・金沢八景同様に江戸でできたものが多いのであろう。こ

れらには墨付きのよくないものが多いので、地元で印刷されたものと思われる。本図は版木自身に〃上之宮〃の刻記はないらしく、蔵板印は別に藍や朱にて押印されたものである。上之宮にて配附する際に押したのかもしれない。絵図屋善兵衛のようなところで版木を預り、印刷していたことも想像できる。本図の刊行年代は文化四年に焼失した絵図屋再版図とほゞ同じ頃にも思われる。本図は絵図屋版の両版より一まわり大きい図なので、今のところ所在を聞かない再版図と考えるには想像逞しすぎるであろう。図題からみて、絵図屋のものではないものと思われる。巻末の図版は長沢規矩也氏所蔵図三枚の内、最も早印の図（四二・六×五九・六糎）を使用させていたゞいた。

（図版8）

金沢文庫には本図（右の〃渡しば〃に直した図）の彩色模写図と思われる文政十二年中洲敏卿写図が所蔵される。

(九)江之島金亀山三宮細見之図　並寅君賓画　〔江戸後期〕刊

江の島・上之宮蔵板（長沢規矩也氏　金沢文庫　慶應義塾図書館　藤沢市立文書館　三康図書館部二所蔵）

前掲図より一まわり小さく、絵図屋版二種と同様の大きさであるが、右側の図題が前掲図と同一で図柄もよく似ているので、同図をもとにして作図したものと思われる。図題下方には画筆の刻記「並寅君賓写」がある。この刻記から画師の名前を考えると、〃並〃のつく姓の人で、本名〃寅〃、号或いは字〃君賓〃であるようにも思われるが、今のところいかなる人であるかわからない。左下には「上之宮蔵板」の刻記と前掲図(八)に押印された上之坊朱印記二種（陽刻と陰刻）が押されている。この刻記・印記よりみて、前掲図及び後掲図と違い、上之坊蔵板図であることは確かであろう。前掲図によったためか、芭蕉潮墳碑と服部南郭詩碑は題字だけでなく絵もない。その附近で見物していた人もいなくなっている。同様に〃西方寺〃〃延命寺〃がない。円可寺も同様で〃上之坊〃の右にみえる建物がそれであろうか。本図は前掲図を建物の向き・町屋の小溝まで、ほゞ踏襲して描いているが、見物人や舟のような細かいところを省略している。しかし富士山は絵図屋文化五年版同様に島の左側にあり、その下には前掲図にはなく同図にある白菊の和歌「しらきくとしのふの里の人とはゝ／思ひ入江の島とこたへよ／しらきくの花の情の深き海に／ともに入江の嶋そうれしき」がある。更に龍池の口が文化五年絵図屋版及び松寿軒図同様に海よりか

なり上方に位置している。これらをみると、本図は吉田蘭香図(八)をもとにして、文化五年版(六)により校定して作られているように思われる。巻末図版は慶應義塾図書館所蔵図（三五・六×四七・二糎）を使用した。（図版9）

(10)江之島金亀山三宮細見之図〔江戸末〕刊　江の島・上之宮蔵板ヵ（金沢文庫印早　長沢規矩也氏　藤沢市立文書館　堀江善次氏　神奈川県立文化資料館以下後印　家蔵）

本図は前掲並寅君賓図と同図柄・同図題（同一位置）であり、所収地名も一致しており、更に明治以降と思われる後修印図もあるので、同図をもとにして作られていることが考えられる。稚児ケ淵から魚板石に到る岩場にある階段状の通路のきざみも前掲図を踏襲したものであろう。島の左側海上の冨士山は少し粗い描き方で同位置に、下方には同様に「しらぎくとしのぶの里の人とはゝ／おもひ入江の島とこたへよ／白きくの花の情のふかき海に／ともに入江の嶋そうれしき」がある。本図は全て同版であるが、早印から後印になるまで、三種の図がある。

(1)右は早印図について述べてきた。前掲図と同じ上之宮の朱印二種（陽刻と陰刻）が押印されているので、早印時は上之宮が蔵板していたのであろう。（金沢文庫所蔵三三・二×四八・二糎）

(2)若干後刷になると、この上之宮の朱印記はなくなり、版木に四箇所の修正が行なわれる。対岸の渡し場の題字「かたせ／わたしば」（単辺枠内）の内、「かたせ」の一行をけずり空白にし、「本宮旅所」「本宮岩屋」をうめ木にて各「御旅所」「岩屋」に直し、魚板石沖の波が少しなくなっている。この修印時は明治になっているのかもしれない。（藤沢市立文書館　堀江善次氏所蔵）

(3)更に後修印図で、すでに明治期の印刷である。冨士山の下に書かれた白菊の和歌四行全てが版木からけずりとられたらしく、図面からなくなる。巻末の図版は家蔵のこの後修印図を使用した。（長沢規矩也氏　家蔵三一・四×四七・四糎）（図版10）

現在、江島神社社務所にて販売されている複製図「古図相州江の島」はこの後修印図(3)を底本としたものである。但し、後印図のために印面が磨滅してしまった図をもとにした影印図の題記を、そのまゝ読むのは難しい。この影印図はかなり島内の地名の題記に筆を入れ、読みやすくして印刷されたものである。

㈡〔江の島絵図（仮題）〕〔文化・文政〕刊（長沢規矩也氏　金沢文庫所蔵）

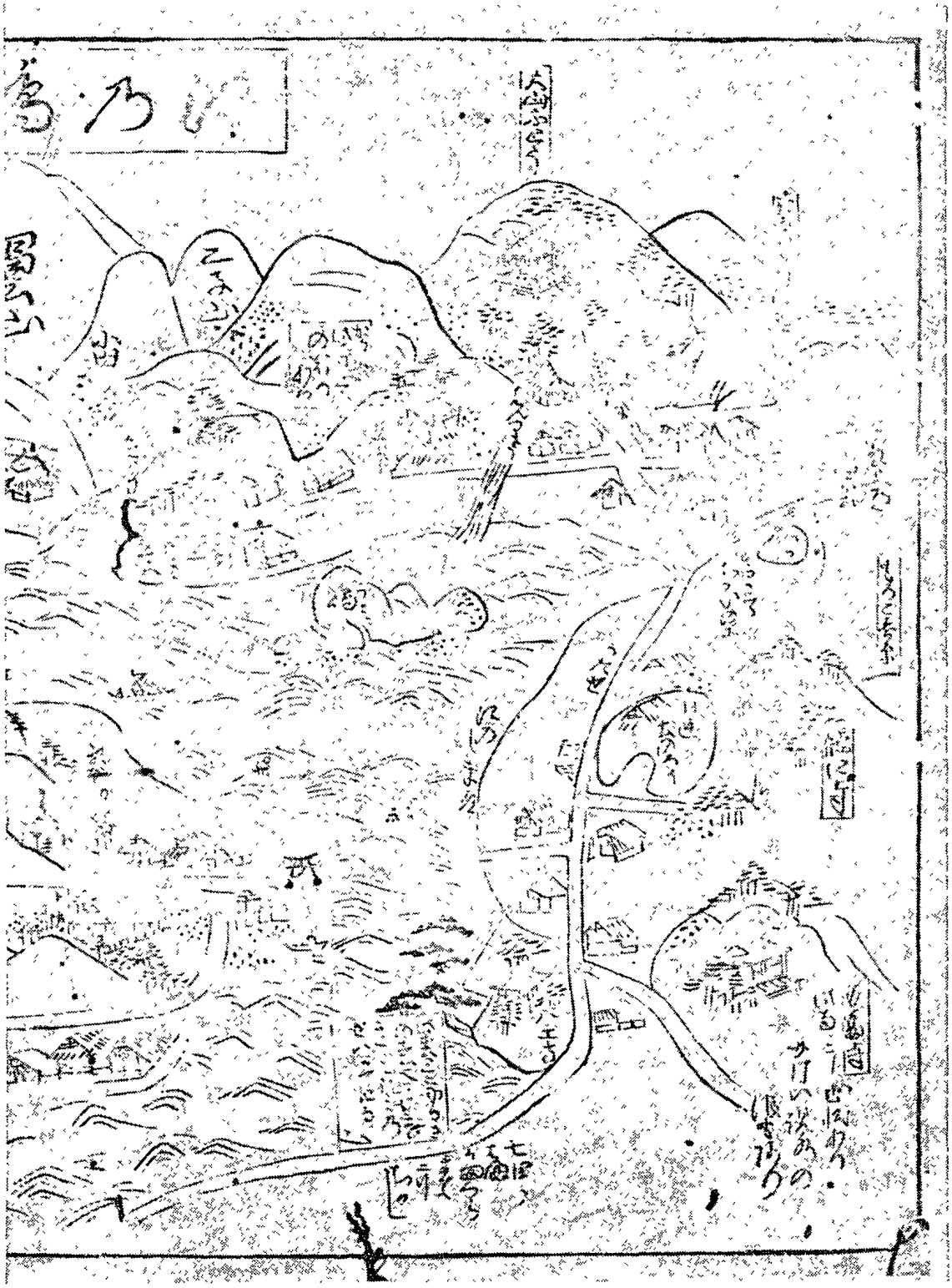
本図は江戸前期・中期の図のように、江の島を中心におき、対岸には片瀬・腰越・七里ケ浜が、背後には伊豆大島、ふもとに小田原城が描かれた箱根山・大山等の相模の山々・富士山らしき高峯が配されている。版式・印刷が粗野であるので一見江戸中期の刊行図のように古くみえるが、実際には江戸後期のものと考えるのが妥当であろう。本図には図題も刊記もない。そこで、図柄から刊行年代を考えていきたい。島の形は明らかに江戸中期ではなく後期以降のものである。似た図を求めると、吉田蘭香図㈧と類似するところが多く、三天・岩屋・竜池、更に岩本院の描き方が、同図を略図化したものであるように思われる。島の入口・三社内の建物をみても同図を単純化したと思われるところが多い。吉田蘭香図以下三図㈧～㈩同様に〝円可寺〟の題記はなく、上之坊の建物の右に山に隠れたかっこうで、それらしい堂がみえる。これも同図を踏襲したせいではないだろうか。江の島の左方、稚児ケ淵左に白菊の和歌があるが、二首共に他の絵図の所収歌とは若干異なり、「白きくのしまのなさけのふかきうみに／友に入江の嶋とこたへよ／しら菊のいつこの人と人とへは／しのふの里の白菊とこたへよ」。三天には注縄がかゝるが、吉田蘭香図以下三図㈧～㈩同様に、芭蕉潮墳碑（寛政九建）と服部南郭詩碑（文化二建）がない。吉田蘭香図には和歌がないので、この二首を附け足したと考えれば納得がいきそうである。本図には片瀬側の渡し場に鳥居がみえる。同所には江戸鉄砲洲住吉屋作兵衛が文化二年に寄進した鳥居のあったことが知られている。その鳥居であるとすれば、本図は文化二年以降に刊行されたことになる。巻末の図版は長沢規矩也氏所蔵図（二九・七×四五糎）を使用させていたゞいた。同図の料紙は左に細い紙を継いで作られている。（図版11）

この他、竜谷大学図書館所蔵「江之島絵図（江戸後期写）」を調査した。同図は良質な料紙にていねいに書写されたもので、同装訂の「鎌倉絵図」と一組になっている。島内の題記は小さい金紙に書かれ、絵図に貼り込まれている。右の各刊行図と比較すると、江戸後期のものと大体合致している。同図は島と対岸を描く色鮮やかな写図ではあるが、細かい地名は書き込まれておらず、江の島の表と裏を分かつ括れのある〝山二つ〟の位置にその特徴がみうけられない。

（注）「倭名類聚鈔」相模国鎌倉郡の項に、沼浜・鎌倉・埼立・荏草・尺度・大島の各郷が所収される。この内〃大島〃を〃江の島〃と考える説があるが、確たる根拠はない。島の対岸〃片瀬〃は、既に正倉院所蔵白布（天平勝宝元年十月調庸）の銘文中に〃方瀬郷〃の名称でみられる。安易に江の島或いは対岸一帯をこの〃大島〃に比定することはできない。

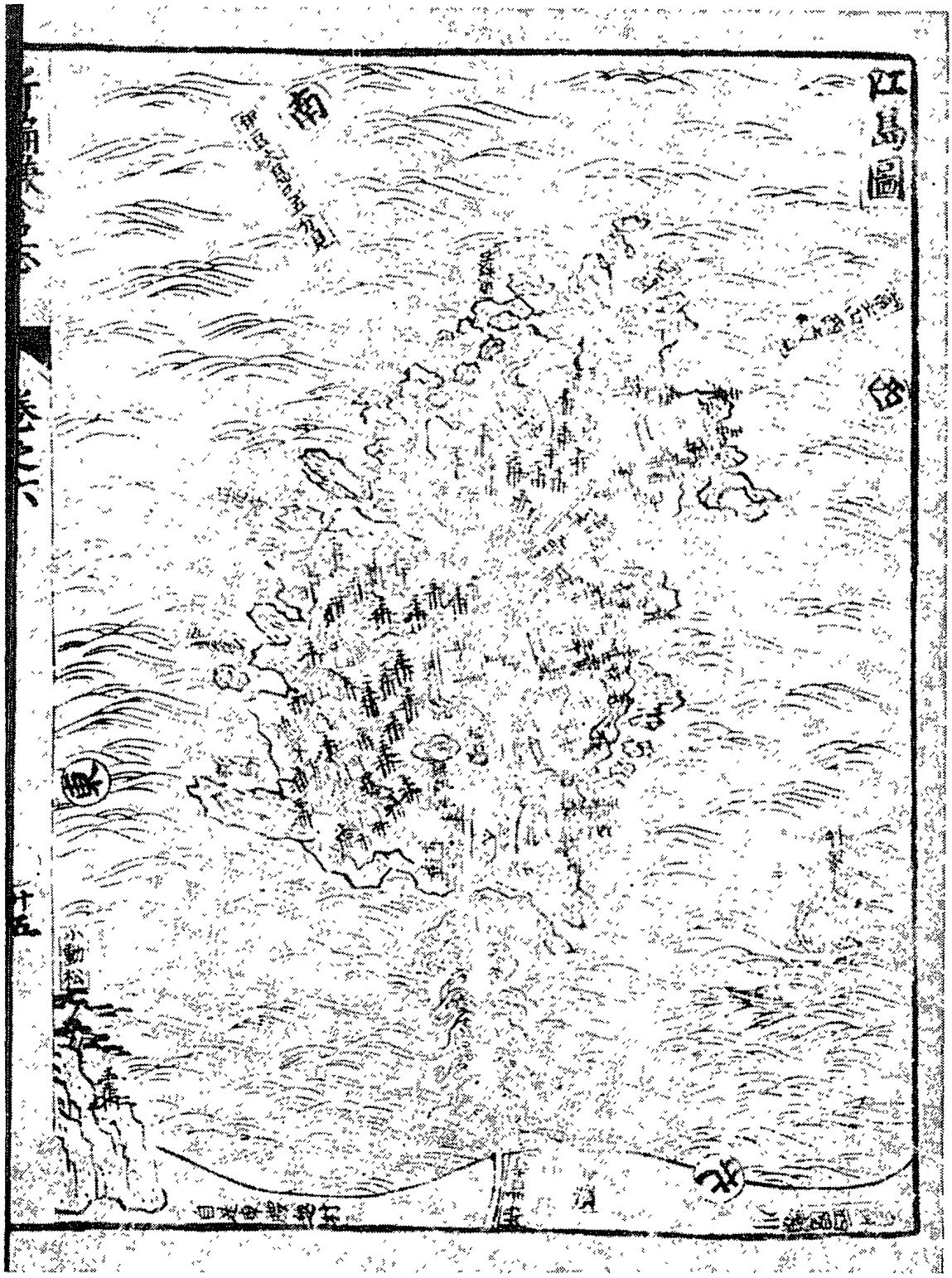
本稿をまとめるに当り、長沢規矩也氏・孝三氏には貴重な絵図類を快よく利用させていたゞき、大変お世話になった。又、前田元重氏には資料についての知識を、江の島絵図屋善兵衛の後裔に当られる堀江善次氏には島内の細かい地名について御教示いたゞいた。三井文庫・国立公文書館・金沢文庫・神奈川県立文化資料館・藤沢市立文書館・東北大学附属図書館・竜谷大学図書館その他、貴重な資料を閲覧・撮影させていたゞいた皆様にもありがたく感謝いたしこゝに厚く御礼を述べさせていたゞく次第である。

図版１　江之嶋絵図　松尾七左衛門版　（２）　三井文庫所蔵



図版２　江乃嶋絵図　（３）　長澤規矩也氏所蔵

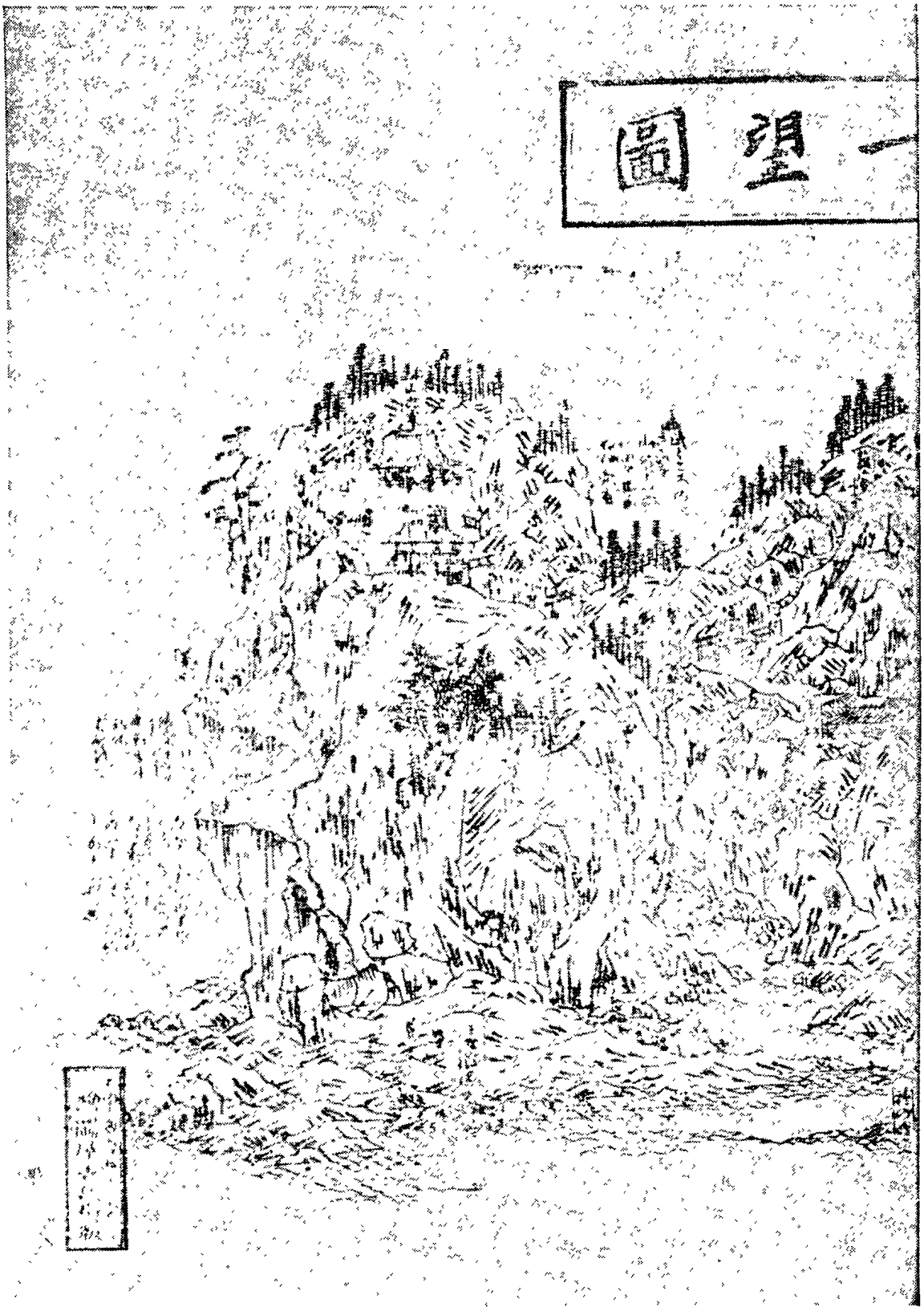
図版３　「和国名所鑑」所収図　天和３刊　慶應義塾図書館所蔵

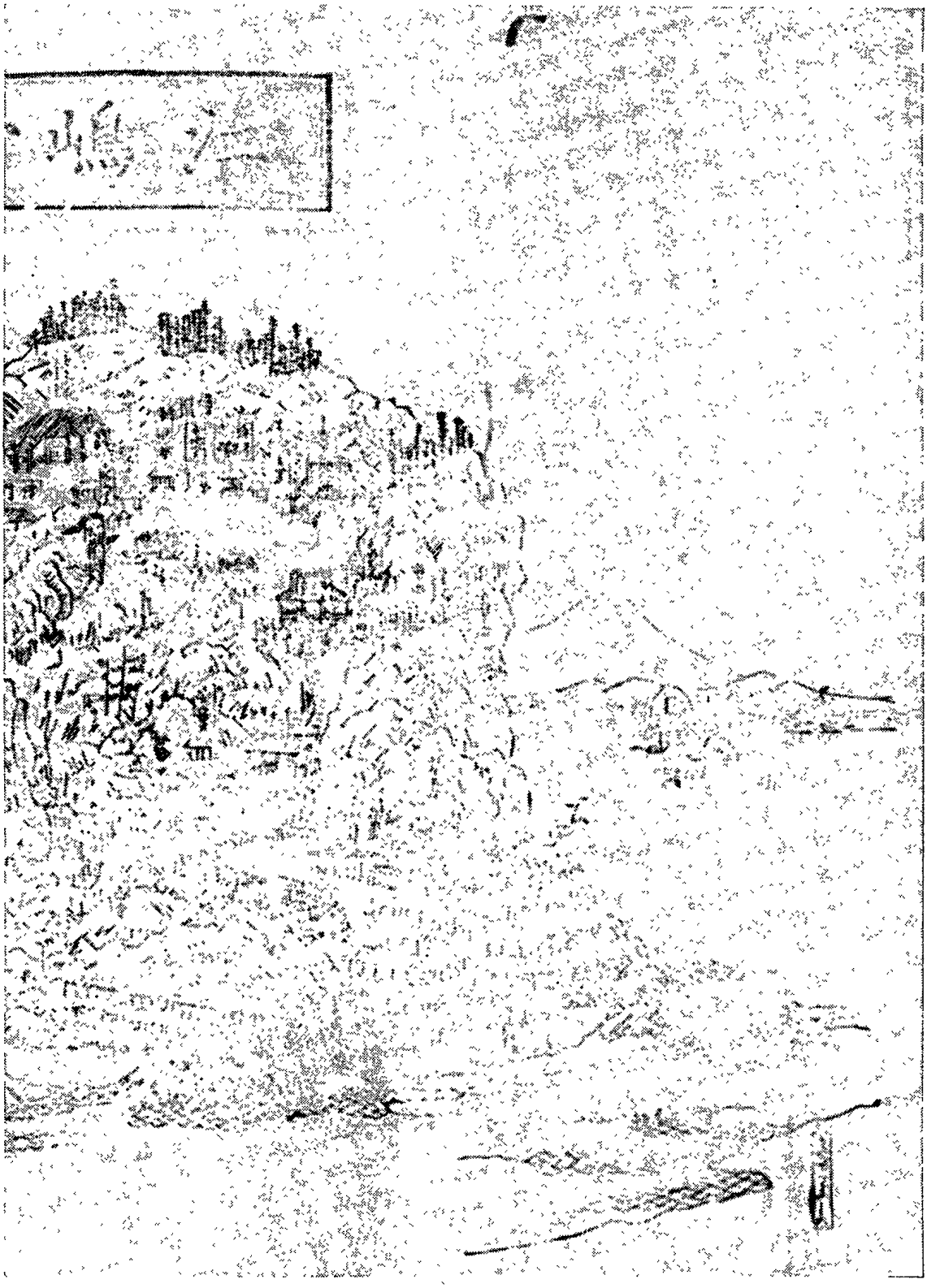


図版４　「新編鎌倉志」所収図　貞享２序刊　参考（１）　慶應義塾図書館所蔵

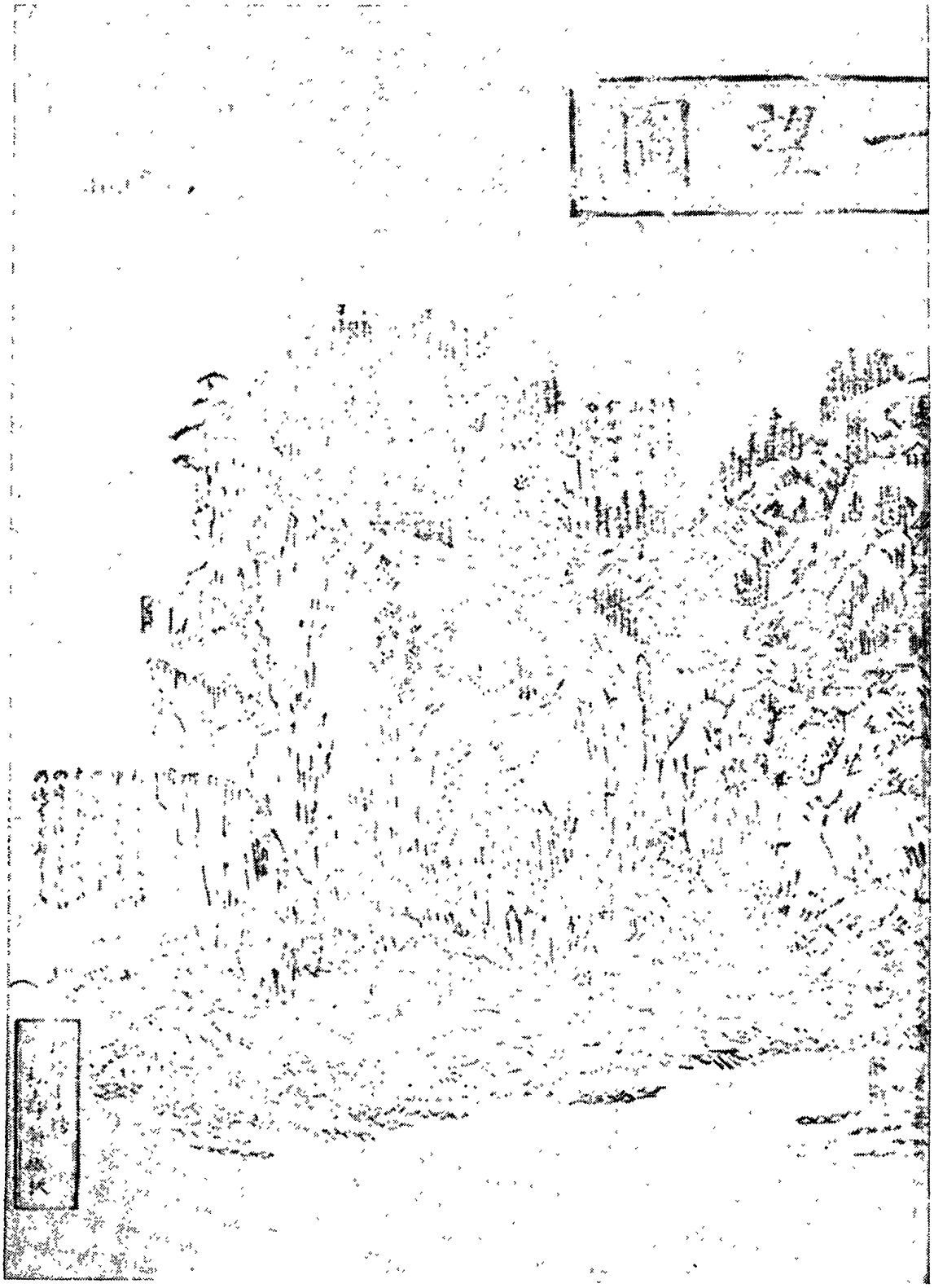
図版５　江之島金亀山細見之図　絵図屋善兵衛版　（５）　長澤規矩也氏所蔵

図版６　江嶋一望図　文化５　絵図屋善兵衛版　（６）　家蔵


一望圖



図版７　江嶋一望図　松寿軒版　（７）　神奈川県立文化資料館所蔵


一望閣

図版８　江之島金亀山三宮細見之図（吉田蘭香）（８）　長澤規矩也氏所蔵

図版９　江之島金亀山三宮細見之図（並寅君賓）（９）　慶應義塾図書館所蔵

図版10　江之島金亀山三宮細見之図〔後修〕（10―3）　家蔵

図版11　江の島絵図（仮題）（11）　長澤規矩也氏所蔵